

# 地域医療連携室たより

No.12

発行日

2009年1月10日

医療法人社団松柏会  
至誠堂総合病院



地域医療連携室たより  
第12号

テーマ「高齢者医療と地域連携」

様々な課題の提起がなされる 高齢者にやさしい医療を

「至誠堂総合病院 第1回地域連携交流会」開催 11月20日午後6時半～



高橋敬治院長よりあいさつ

## 地域住民のために医療従事者は日夜奮闘している

昨日来の雪で足元の悪いなか、42施設163人の方に参加いただき、感激している。厳しい医療情勢のなかで昨日は全国知事会で麻生総理が「医師は常識が足りない。地域の医師不足は医師自身の責任だ。」と啞然とするような発言があった。こういうなかでも私たちは地域住民のために貢献していかなければならないと日夜苦しみながらやっている。皆さんのいろんな助けによって当院の医療活動が成り立っていると心から感謝申しあげたい。



高橋敬治院長

横山雄治院長  
(とかみ共生苑)

## 明治36年、創立105年

当院は古い、歴史ある病院。初代院長は中原貞衛氏。市内では済生館につぎ、2番目にできた病院である。特筆すべきは、地域住民とのつながりを深めてきたことである。40年前には、現在6000人の会員のいるやまがた健康友の会を、30年前には、それぞれの疾患の患者会をたちあげた。また、在宅患者の支援において山形県で第一号となる老人訪問看護ステーションをたちあげ、特例許可老人病棟を早々につくってきた。そのなかで今回、地域の医療機関、福祉施設との連携を深め、サービスを向上させる目的で第1回地域連携交流会を開催した。

## 課せられた課題は2つ 医師の確保と医療内容の向上

私が院長に就任し4年半が過ぎた。私に課せられた課題は、医師の確保と医療の質、医療内容の向上である。また、地域における病院の存在意義をどのように確立するか。市内には17施設ほど病院がある。そのなかで皆様と連携を深めながら、この病院の将来あるべき方向性を求めていきたい。今日は皆さんの活発な意見をいただき、燃え上がる会になることを期待している。

## 第一部 症例意見発表

### 「高齢者医療の特性と当院の役割」

至誠堂総合病院 副院長 伊藤 英三 医師

呼吸器内科を中心に診療している。連携に関わる4症例を提示した。嚥下性肺炎で入退院を繰り返し、施設から再入所を拒否された症例。90歳の女性、腸閉塞。前病院にて高齢のため原因検索、手術されないまま保存的療法。病状安定したとして当院に転院。その後も繰り返し腸閉塞となり、結局当院にて手術療法し治癒。今元気に通院している症例など。

当院は急性期病院から療養目的の転入院要請が多い病院である。要請があると多職種参加の入院判定会議で検討し、当院での入院目的を明確にした上で受け入れている。転入院受け入れ以降、病状評価・治療継続をしつつ本人家族と協議調整をはかり、退院できる様援助している。介護福祉制度を利用しながら自宅に帰る例、施設入所を援助する例など当院の力の発揮どころと考えている。一方、少数ながら転入院間もなく死亡される例があり、また当院の入院を待っている間に前の病院で亡くなる例もあって、入院期間を極端に抑制せざるを得ない現在の日本の医療制度の問題点を感じている。

さらに、NST・褥瘡・摂食嚥下など当院でのチーム医療の取り組みを紹介した。

創立105周年を迎えた当院。医療機能評価Ver.5認定を受けたことも踏まえ、先輩職員の方々の力を引き継いで地域医療に関わっていききたいと考えている。



### 「認知症のサインについて」

二本松会山形さくら町病院 村岡 義明 医師

地域に多く見られる認知症の患者さんをどのタイミングで専門医に紹介したらいいか参考にしていただきたい。認知症の中核症状と周辺症状、早期診断の必要性、疑われる症状、疑う行動の変化の報告。さらに山形さくら町病院での統計の報告。

フロアよりの入院のガイドラインは？との質問に対し、薬物治療をおこなっても、興奮、徘徊など問題行動がおさまらない。家族も介護に耐えられないなど。高齢者は合併症をもち、薬も多剤服用していることが多く、何らかの副作用が伴う。薬剤を整理してよくなった例について？との質問に対してせん妄、徘徊があり、多科、複数の病院に通院。薬剤性のせん妄を疑い、整理し、症状が軽減した例があるなど。

平成20年4月1日より全面改装になった山形さくら町病院の紹介。総病床数は332床、うち認知症治療病棟は51床。デイケア「悠ゆう」を実施している。



### 「ある一症例」

医療法人橘会 橘医院 橘 英忠 医師

先代、父が開業し、今年で33年、3年前から父と一緒にやりはじめた。

高血圧診療継続を希望、75歳一人暮らし女性の症例を通しての発表。高齢者医療では、「Who（誰が）、What（誰を）、When（いつ）、Why（なぜ）、Where（どこで）、How（どの様な形で）」が大事になってくる。

総合病院に望むことはひとりひとり生活支援の手段が異なる高齢者に適切な対応を行ってほしい。また、「大きな病院に紹介すると患者を返してもらえなくなる。」と。診療所に必要なことは、守備範囲を把握し、紹介先に伝えることが必要である。

高齢者を疾患のみでみるのではなく、患者一人ひとりの人生観、社会背景を含めた全人的な医療が中年・若年者以上には大切であり、今後も努めていきたい。



## 「摂食嚥下障害治療における地域連携」

至誠堂総合病院 中原 章 言語聴覚士

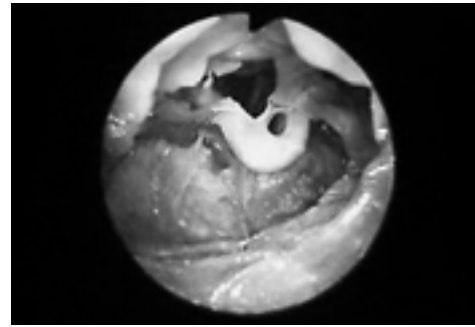
当院摂食嚥下チームの院内及び地域連携に向けての活動、症例について紹介した。

摂食嚥下治療の目的となる「食べる事の意義」について述べた。「生きるために食べる」という大前提の他、患者・家族間におけるコミュニケーションの架け橋として、食事は大きな役割を果たす。また口から食べる事がより効率的な栄養の吸収ができ且つ免疫機能を生かせる（口腔寛容:オーラルトレランス）。咽頭の清潔維持にも口から食べる事が大きな役割を果たす事が挙げられ、1年間経口摂取を行わなかった方の汚染された咽頭内を映像として示した。MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）やVRSA（バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌）が咽頭内に常在し、気道感染症の原因になりうる可能性を示唆した。

当院の摂食嚥下障害治療については、担当医による診察・言語聴覚士によるベッドサイド評価・嚥下内視鏡検査（VE）・嚥下造影検査（VF）・基礎訓練（食べ物を用いない訓練）・直接訓練（食べ物を用いた訓練）といった一般入院の一連の他に、外来・1泊2日の評価入院の紹介を行った。

地域連携に向けての取り組みとして、特別養護老人ホーム入所中の元菓子職人の症例について、往診という形で嚥下診療が介入した事で濃厚流動食管理だった方が経口摂取自立に至った経緯を紹介した。

在院日数短縮が迫られる中、医療依存度の高い患者が在宅や福祉施設で生活者として生きていく事になり、これは今後増加していくと思われる。この様な方々の「食」をどの様な形で支援していくかを今後の課題として考えていきたい。



咽頭汚染

## 「嚥下検査を開始しての成果」

六日町あいあい特別養護老人ホーム

小川美由紀 歯科衛生士

池田百合子 管理栄養士

六日町あいあいの施設概要 長期入所者80名、ショートステイ20名、デイサービス20名。

以前より摂食嚥下障害を疑う入所者のケアに悩んでいた。食事形態の工夫などをしてきたが、危険を伴う手探りのケアであった。しかし、平成20年2月より、至誠堂総合病院より嚥下検査往診を受けるようになったことで、食事形態や食事介助・口腔ケアにおいて個々人に合わせた対応ができるようになった。

また、取り組みを続けてきたことで、職員が食事や嚥下障害に対して関心を持つようになり、施設全体のケアが向上した。結果として「肺炎」発生が減少傾向にあるようだ。そこには各職種間の連携が不可欠であった。

嚥下検査に関わったことで歯科の介入の必要性にも気づいた。「栄養摂取」という繋がりにおいても口腔ケアは重要なものである。

しかし、残念なことに嚥下検査往診はまだまだ市内において普及していない現状である。そのためには、検査医や嚥下障害に関わる職種の増加が必要である。今後、地域の方々にも普及していくことを望んでいる。

## 閉会の挨拶

至誠堂総合病院 副院長 三宅 公人 医師

私どもの病院は、ここ40年来お年よりを軸とした医療を展開してきた。私たちがやってきた医療がこんなにたくさんの方々を支えられてきたんだと改めて考えている。感謝とともに、本当にうれしく思う。今後とも職員一丸となって山形の高齢者のためにがんばっていくつもりだ。また、第2回を準備したい。引き続きご参加をよろしく願いたい。



第二部 懇親会

なごやかに 顔の見える連携を



峯田 武興 医師 (いきいきの郷、輝きの会理事長)

私は外科医で、急性期の患者しかみることがなかった。物を食べないと咽頭があんなによごれるのかなど。老人を中心に診ているということが、たいへん心強い。今後ともよろしくお願ひしたい。



小山 隆信 医師 (二本松会上山病院院長)

うちはどうしても精神安定剤を使うことが多い。精神安定剤は身体的にはどちらかというマイナスのファクターがある。安定剤を使っている患者さんを診ると、いろいろ疑問な点とかおありかと思うが、何かあったら遠慮なく我々をひっぱりだしていただけたらと思う。

間中 英夫 医師 (県立中央病院 地域医療部長)

急性期の病院もいろいろ苦勞があり、皆さんにご迷惑をかけていることが多々あるかと思う。それを面とむかっていうとなかなか大変だ。この交流会が時を経て、回数を重ね、お互い顔が見えて、すぐ意見が交換できるような会にできればいいと思う。



乾 杯

松柏会 理事長 皆川 榮助

テーマ「高齢者医療と地域連携」のもとたくさん参加いただき、感謝申しあげる。先日麻生首相の全国知事会での発言。地域連携を一層強固にし、麻生首相の暴言に対抗していきたい。



日本医療機能評価機構認定施設  
病院機能評価 Ver.5



編集後記

連携交流会は華やかなものだった。夢をみていたのかと思うほど。でも、日常は地味に一步、一步、着実に医療活動をすすめていくことが求められている。(K)

至誠堂総合病院

地域医療連携室

山形市桜町7-44

023-622-7551

<http://www.shiseido-hp.jp>

[renkeisitu@shiseido-hp.jp](mailto:renkeisitu@shiseido-hp.jp)

発行責任者 至誠堂総合病院副院長

伊藤 英三

編集 地域医療連携室